



Title	新井重三先生（1920～2004）の博物館学思想
Author(s)	青木, 豊
Citation	Museum study, 20: 1-7
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/7151">http://hdl.handle.net/10291/7151</a>
Rights	
Issue Date	2009-03-26
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# 新井重三先生（1920～2004）の博物館学思想

青 木 豊\*

新井先生の学問的出自は地質学であったが、秩父自然科学博物館への奉職を契機に博物館学者の道歩んだ人物である。

博物館学形成期であった二十世紀後半を通じて、博物館学の大系化を企てると同時に、鶴田総一郎・倉田公裕・加藤有次・小森厚らと博物館学界を牽引した一人であった。

顕著な博物館学上で展開された理論として、先ずあげられるのが「総合展示論」と当該論より更に理論展開した「ダブルアレンジメント論」であるところの博物館展示論の展開であった。本分野は博物館学の中でも新井が専門とする部門であり、研究上の熟年期に相当する昭和五十六年（1981）には「提示と説示」なる用語を提唱、使用することにより「展示の形態論」を著し、今日にも今なお引き継がれている理論となっている。

次いで、新井の業績を代表するのは、「野外博物館論」であり、晩年に本論はアンリ・リビエルの「エコミュージアム」理論と融合させて展開するに至り、“ふる里創生運動”と相俟って地域社会の活用思考の上で大きな影響を与えたものであった。

## 略歴

埼玉県入間郡日高町（現日高市）に生まれる。地元の高麗尋常小学校・高麗高等小学校

を卒業後、昭和十七年（1942）三月、埼玉県立埼玉県師範学校本科一部を、昭和十九年九月に東京高等師範学校内東京第一臨時教員養成所博物学科を経て、昭和三十二年十月東京文理科大学地学科地質学鉱物学専攻を卒業。

以上からも明確であるように学問的出自は、地学であり、卒業と同時に東京文理科大学地質学鉱物学教室の副手を一年間務めた後、昭和二十三年十月には秩父自然科学博物館研究員となっている。

秩父自然科学博物館は、現在の埼玉県立自然の博物館の前身で、秩父鉄道株式会社が、大正十年（1921）に開設した鑛物植物標本陳列所を嚆矢とし、昭和二十四年に秩父自然科学博物館として開館した博物館であるところから開館に際して、つまり博物館をつくる為に奉職したものであったことが窺い知れる。

昭和三十九年十二月には、秩父自然科学博物館主任を辞し、埼玉県立理科教育センターへ移籍し地学教育担当の指導主事となり、その後同センターの指導部長を務めている。

昭和四十一年四月には、埼玉大学教育学部助教授となり、昭和六十一年三月に埼玉大学教育学部教授を退官するまでの間、長らく博物館学を講じられた。

また、これらの間、群馬大学・茨城大学・東京教育大学・筑波大学大学院・千葉大学等

\* 國學院大學教授、本学兼任講師（大学院）

々で講師を務められ、理科教育・堆積学・地学・博物館学等を講じられた。

退官後の昭和六十一年四月からは、㈱丹青総合研究所顧問となり、殊にエコミュージアム理論の啓蒙と実践に徹するなど、終の研究の場となった。

この間、昭和六十三年四月から平成三年四月までの三年間は、上武大学経営情報学部教授を勤めている。

平成十六年（2004）九月二十五日、逝去享年八十三

## 研究業績

新井の博物館学に於ける嚆矢となる論文は、1953年『日本博物館協会会報』16号に掲載された「わたくしの博物館学—総合展示の原理と発展について」であり、これは秩父自然科学博物館へ勤務した五年後のことで、新井三十三才の時である。

これを機に、その後五十余編の著作が発表されるのである。その中でも形として代表となるのは、1979～1981年に互り刊行された『博物館学講座』全十巻（雄山閣）の編集及び執筆者であり、その中でも『一、博物館学総論』と『七、展示と展示法』は責任編集者となり、博物館学及び博物館展示論の大系化を企てた点が、顕著な業績と評価される。内容的には以下詳述する通りである。

## 総合展示

新井の称する総合展示と同義と思われる「総合的陳列」なる展示用語を見出すことができるのは、棚橋源太郎による『博物館学綱要』（1950 理想社）の「時代陳列室」の項である。

棚橋は、改良時代陳列法として「総合的陳列」なる用語をはじめて記したのである。本総合的陳列は具体的に、如何なる展示法を意図したかは測り難いのであるが、当該著書から三年後に刊行された『博物館教育』（棚橋

1953 創元社）では、「総合陳列」の項を設け具体的に記している。

総合陳列（Synthetic display）分類式や年代順の陳列は、動植物学専攻の学者学生や、美術史専攻の人達には便利だろうが、素人の大衆には余り興味がないというので、博物館学博物館などでは動物の剥製標品を、その棲息原地の植物土石などと一緒に、総合的に陳列してその生活状態を示す、いわゆる原地グループ（Habitat group）陳列法が工夫された。歴史美術の博物館でも、或る時代の文化の特色を表現するために、絵画の額・工芸品・家具・狩猟具・農工具・家庭用品などを、組み合わせる総合的に陳列するところの、いわゆる時代室（Period room）と称する陳列法が発達した。十七世紀の北欧小農民の台所とか、十八世紀フランス貴族の居室とか、昔の鍛冶錬金術の細工場というが如きがそれで、総合陳列の一種である。

棚橋の言う総合陳列とは、原地グループ陳列法と時代室を具体的に指していることは明白であり、1930年の棚橋の著書『眼に訴へる教育機関』（寶文館）では、原地グループ陳列法とジオラマ式陳列と時代陳列室を「組み合わせ陳列（グループエキシビジョン）」と呼称しているところから、棚橋の言う「総合的陳列」・「総合陳列」の意図する根幹は、複合資料による組み合わせ展示を指し示したものであり、この考え方は博物館界に於いて広く踏襲されて来た。

具体的には、1956年に『博物館学入門』（日本博物館協会）を著した当該期を代表する博物館研究者の鶴田総一郎に於いてすら、正に棚橋の総合展示理念を継承したものであり、そこには理念上の新たな展開は何ら認められないものであった。

つまり、棚橋理論が博物館学界に於いて絶対的理論とする中において、1953年新井は、総合展示に新たな考え方を明示したのであった。当該論は、(その一)、(その二)の二部構成からなり、(その一)は『博物館研究<sup>註1</sup>』に、(その二)は『日本博物館協会会報<sup>註2</sup>』に掲載された論文であった。

(その二)の「一、個体の羅列式展示から総合統一的展示への発展」の項で、新井の総合展示理念を明確に記している。

そこで、わたくしは、この展示形態を更に一步発展せしめて、対象の分析にとどまっていた標本を、全体の部分と考えることにより、合目的に、部分(標本)の量を集積綜合することにより、質的変化を起さしめ、統一をもたせた展示様式を研究しなければならないと思うのです。(中略)

わたくしが、この展示様式を特に総合展示と名付けたわけは、従来、単なる質量の集積のみをもった展示様式である、総合展示的なものと区別すること、他の一つは、しばしば、自然科学関係の博物館でみられる、生態展示と区別する必要があるからであります。(中略)

すなわち、標本を生けるが如くに製作し、自然の環境の中にそのまま配列する様式でありますから、この場合には、より自然そのものに近くえがきだすことが生命であります。ところが、わたくしの提案する総合展示は、展示責任者の、あるテーマに対する結論的な意思を表現するものでありますから、著作にも似た感覚と責任をもって、統一体としての展示を実施してゆかなければなりません。なお、この展示様式は自然科学関係のみならず人文科学関係の博物館にも十分適用されるものと信じます。

展示様式としての、画期的とも賞賛できる新たな総合展示論を提唱したのであった。

次いで、昭和三十三年には「博物館資料の展示法とその形態について」<sup>註3</sup>では、更に博物館展示を「分類展示法」と「総合展示法」に二大別し、両者の展示の理論とそれらの博物館における関係と、その必要性を明記したものであった。本論点が後述する新井展示論の核を成す「二重展示(Double Arrangement System)」論の萌芽であり、当該「二重展示」理論は、昭和四十五年の「博物館の展示<sup>註4</sup>」、昭和五十六年の「展示の形態と分類<sup>註5</sup>」へと受け継がれ理論的完成を見たのであったのである。

## 二重展示(Double Arrangement System)

新井が提唱した二重展示理論に、配列の上での観点で類似する先行理論として、棚橋源太郎が提唱した二元展示論がある。二元展示は、厳密には「資料の二元的配置」であり、当該展示名称は昭和二十五年『博物館学綱要』の中で初めて使用し、次いで昭和二十六年の『博物館教育』においても展開された理論である。

その理論内容は、従来の展示室における展示のみに留まるのではなく、これに貯蔵室(収蔵庫)を展示に供することを提言したものであった。

つまり、展示室と収蔵庫の二つの場所での展示を意図したものであった。さらに、ここで重要である当該理論の特徴は、展示場所の異なりが展示レベルの差異に直結している点であったことを最大の特徴とする。学者や専門家の研究に資する資料と生徒や一般大衆の観覧に供するための資料との分離による展示で、博物館展示に望まれる基本要件の一つである見学者の知識のレベル差異への対応に配慮した展示理論であったのである。

当該、「二元展示」に対して、新井は「二重展示法」を提唱し、昭和三十八年には愛知

県鳳来寺山自然科学博物館においてその理論を実践したのであった。

棚橋の言う二元展示と基本的に異なる点は、二元展示は標本保管室（貯蔵室）と展示室に於ける二ヶ所での展示での二元展示であったのに対し、新井の意図する二重展示は標本保管室ではなく、あくまで二つの展示室での展示であり、そしてそれらは分類展示室と総合展示室によって構成されるというものであった。

この新井の二重展示論は、効果的展示方法として各地で実践されていく中において、加藤有次による三重展示論（1977『博物館学序論』）や、筆者による「新しい二重展示」（2002『博物館展示の研究』）の提唱の基本論となったのである。

#### 提示・説示・教育展示の提唱

展示の原則の一つである展示形態論については、明治三十四年（1904）の前田不二三<sup>註6</sup>による論文が濫觴と思われる。前田は展示の基本形態を情的展覧・知的展覧に二分したのであった。

その後、木場一夫（1949『新しい博物館』）はほぼ同一分類意図をもって、審美的・教授的と呼びならわし、更に鶴田総一郎（1956『博物館学入門』）は教育展示・鑑賞展示と用語の変更を行い、以降今日に於いても教育展示・鑑賞展示なる両用語は、まだまだ使用されているのが現状である。

かかる現況の中で、昭和五十六年新井重三は、当該論点を展示学の原則と位置づけ、次の如く提案した。<sup>註7</sup>

博物館における展示とは展示資料（もの）を用いて、ある意図のもとにその価値を提示（Presentation）するとともに展示企画者の考えや主張を表現・説示（Interpretation）することにより、広く一般市民に対して感動と理解・発見と探

究の空間を構築する行為である。

新井が命名した「提示」・「説示」なる呼称は、従来博物館界で呼称されてきた「鑑賞展示」・「教育展示」の単なる呼称名の呼び替えの提唱のみを目的としたのではなく、従来の「鑑賞展示」に対する新たな意味を持った「教育展示」を提唱したのであった。

しかし、研究者によっては展示は教育論の展開で説明すべきであるという考え方も発表されている。「展示は教育活動の一環」とする考えに立てば、博物館展示はすべて教育展示ということになる。教育の手法にはコミュニケーションを活用していることは議論の余地のないことであるが、だからといってコミュニケーションを活用しているものはすべて教育にはならない。新聞も、ラジオもテレビも教育活動として位置づけられてはいない。しかし、テレビの中には教育テレビがあり教育を目的として編成された番組が放映されていることも周知の事実である。そのように考えてみると博物館展示の中に教育目的を鮮明に打ち出した教育展示があってもよし、そのような展示があることが望ましい。

ここで新井の考える教育展示とは、従来区分されてきた鑑賞展示に対する教育展示といった広範な二区分制に基づくのではなく、直截に教育を目的とした展示を意図したものであり、従来の二区分から三区分に至った斬新な提言であったと評価でき得るものであった。

具体的には、科学館等の展示を指すもので、歴史・美術資料の如くそれらの資料から研究により抽出された学術情報を説示型展示を行なうのではなく、既に科学・物理学の理論が有り、それらを伝える為に大半は模型等の当該理論に合致した二次資料を製作し、展

示するものである。

## 野外博物館

新井の博物館学の業績の中で、次いで注目しなければならないものとして「野外博物館論」がある。

また、我が国の野外博物館の体系と、分類の嚆矢をなした研究者が新井であった。その萌芽は、昭和三十一年に著された「野外博物館」(『博物館学入門』理想社)であり、その後、理論の修正がなされ体系化が明示されたのは、昭和六十四年の「野外博物館総論」(『博物館学雑誌』第十四巻)であった。

更に、この間に新井の「野外博物館総論」は、アンリ・リヴィエルの思想に呼応し、その視座を大きく変更し、昭和六十四年には「エコミュージアムとその思想」(『丹青』第六巻十号)を著し、これより晩年はエコミュージアムの研究と、当該思想の啓蒙に専従したものであった。

以上が新井の「野外博物館」とその延長上と思われる「エコミュージアム論」の大まかな流れであるが、詳述すると次の通りである。

まず、「野外博物館」なる用語の使用は、落合知子の研究<sup>8</sup>によれば南方熊楠が濫觴であり、具体的な博物館を意図したものとしては「スカンセン野外博物館」として使用された浜田耕作(昭和四年『博物館』)であるという。

新井は、1956年に「野外博物館」(『博物館学入門』理想社)を著し、その定義の中で、

野外博物館の主体は自然環境の中にはぐくみ育てられた生成物及び人類の生活址であるから、基本的には標本資料の移動は許されない。その意味で移築して建設されたスカンセンの戸外博物館や日本では東京郊外にある保谷のアイヌ家屋等は、この理論からみると野外博物館のは

んちゅうには入らないのである。

この時点での新井の野外博物館は、移設あるいは収集によるものを否定し、あくまで現地に於ける自然や遺跡のみに限定した概念であったことが窺い知れる。

次いで、昭和六十四年に著した「学校岩石園(地学園)の計画と設置の研究」<sup>9</sup>では、学校岩石園を野外博物館の一分野に比定しているようであるが、学校に設置する岩石園は必然的に収集機能が介在するところから、前掲の「野外博物館論」での概念規定と矛盾が生じたためであろうか、本論では野外博物館論を埒外に置き岩石園に徹して論じている。矛盾に対する逡巡が行間から読み取れるのである。

1989年に「野外博物館総論」<sup>10</sup>を著す。実に、当初の「野外博物館」より三十三年、「学校岩石園(地学園)の計画と設置の研究」から二十五年後の事である。

ここで新井は野外博物館の体系を企てると同時に野外博物館の分類を明示したのである。特質としては、当初は野外博物館から除外してきた民家園等の収集行為を伴う形態の館園をも野外博物館に含め、現地保存型野外博物館と収集移設型野外博物館に二大別することで、長年の蟠りから開放されたものと見做せるのである。当該分類は、正鵠を射たものと評価され、現在でも基本概念として取り扱われているものであるが、現今に於いては両者に配属できない建設型とも称される野外博物館学が出現している。

## エコミュージアム

抑々、エコミュージアム理念を我が国へ紹介したのは、昭和四十九年に鶴田総一郎(『全科協ニュース』第四巻六号)が嚆矢となるが、当時の我が国の社会では当該理念への反響が全くなかった。

新井が野外博物館の延長上でエコミュージ

アムの理念に迎合し、はじめて著した論文は昭和六十二年「エコミュージアムとその思想」<sup>註11</sup>である。次いで「野外博物館総論」の中で大きく紙面を割いており、また内容に於いても野外博物館論の到達点として同論を展開しているのである。

また時あたかも、“ふる里創生運動”に基づく地域おこし、町おこしの気運と相俟って鶴田とは異なり、新井のエコミュージアム論は社会に大きな反響を与えたのであった。

#### [主要著作]

「野外博物館総論」1989『博物館学雑誌』第十四卷 第一，二号合併号

「展示の形態と分類」1981『博物館学講座7 展示と展示技法』雄山閣

編著『エコミュージアム入門』1995 牧野出版

編著『エコミュージアム理念と活動』1997 牧野出版

#### [註]

註1, 新井重三 1953「わたくしの博物館学—総合展示の原理と発展について—(その一)」『博物館研究』第五卷第二十六号

註2, 新井重三 1953「わたくしの博物館学—総合展示の原理と発展について—(その二)」『日本博物館協会会報』第二十一号

註3, 新井重三 1958「博物館資料の展示法とその形態について」『博物館研究』VOL, 42 NO, 110

註4, 新井重三 1970「博物館の展示」『博物館研究』VOL, 42 NO, 4

註5, 新井重三 1981「展示の形態と分類」『博物館学講座7 展示と展示法』雄山閣出版

註6, 前田不二三 1904「學の展覽会か物の展覽会か」『東京人類学会雑誌』第十九卷第二百十九号

註7, 新井重三 1981「展示の形態と分類」『博物館学講座』第七卷

註8, 落合知子 2006「野外博物館研究小史」『國学院大学博物館学紀要』第三十一輯

註9, 新井重三 1964「学校岩石園(地学園)の計画と設置の研究」『博物館研究』第37卷 6・7号合併号日本博物館協会

註10, 新井重三 1989「野外博物館総論」『博物館学雑誌』第14卷第1・2号合併号

註11, 新井重三 1987「エコミュージアムとその思想」『丹青』第6卷10号

## The Museological Thought of Arai Jūzō (1920–2004)

AOKI Yutaka

Although Professor Arai's scholarly roots were originally in geology, he became a scholar of museology after being given the opportunity to work at the Chichibu Natural History Museum. Along with Tsuruta Sōichirō, Kurata Kimihiro, Katō Yūji, and Komori Atsushi, Arai was involved in the systematization of museology during the discipline's formative years in the latter half of the 20<sup>th</sup> century.

When looking at the development of Arai's museological thought the first theory that should be mentioned is that of 'integrated exhibition' which he further developed into 'double arrangement theory.' This topic was Arai's specialty within museology. In 1981, a vintage year for Arai, he proposed the concept of "presentation and interpretation." Employing this concept, he wrote about 'the morphology of exhibition' a theory that is still in use today.

Next, representative of Arai's achievements, is his work on open-air museums. In his last years he came up with a fusion between his theories and Henri Rivière's concept of the eco-museum. Coupled with the "Hometown Re-creation Movement" (*Furusato sōsei undō*), this had a major impact on new concepts of the role of local communities (*chiikishakai no katsuyō shikō*).